

「オヒルギ等の立ち枯れ被害モニタリング調査」

西表森林環境保全ふれあいセンター

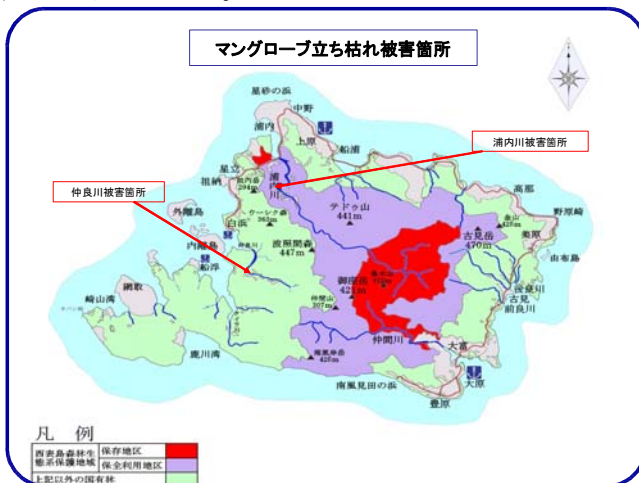
浦内川、仲良川で確認されたオヒルギ等の立ち枯れ被害について、平成 22 年度より被害箇所には調査地を設定しモニタリング調査を始めました。

浦内川では、平成 20 年度の台風通過後に立ち枯れしている状況が確認され、平成 21 年 10 月には更に立ち枯れが広がっていることを確認しました。仲良川では、平成 21 年度にツアーガイド等からマングローブ立ち枯れ被害の情報が寄せられ現地の被害状況を確認しました。

現地では、砂泥が堆積し稚樹の発生も極めて少なく、今後、砂泥の堆積により陸地化しオヒルギ以外の植物が発生することも懸念されます。

調査地は、生立木と枯損木が混生する状況の箇所に設定し、①調査木の胸高直径、樹高の測定、生育状況の確認及び生育位置の測定、②砂泥の堆積状況を把握するためのレベル測量による地盤高の測定、③オヒルギの生育に重要な関係を持つ膝根（オヒルギは、地中を横に這う根の所々が地表に盛り上がるように顔を出してはまた潜り込むという形の物を作る。膝を立てたところと似ているところから膝根（しっこん）という。）の生育状況を年 2 回（春季・冬季）調査を行っています。

調査結果から、枯損木の多い周辺では地表面に出現している膝根より地中に埋もれた膝根を数多く確認しました。また、地表露出膝根を確認できなかった地点で土中埋設膝根の深さが 6 cm～7 cm と深く、枯損木の多い箇所は砂泥が多く堆積している結果を示しています。



浦内川立ち枯れ被害箇所



仲良川立ち枯れ被害箇所

仲間川・浦内川共に、観光遊覧船が行き来することから今後も砂泥の堆積状況や膝根の埋没状況等についてモニタリングを行いデータを蓄積して行くこととしています。